

『雪国』におけるナル表現は *Snow Country* においてどのように英訳されているのか

渡 邊 ゆかり

1. は じ め に

これまで、寺村 (1976) や池上 (1981) を初めとする多くの研究者により、英語と日本語との比較において、英語はスル言語であるのに対し、日本語はナル言語であるという主張がなされてきた。このような「英語：日本語＝スル言語：ナル言語」という図式の成立背景には、様々な要因が存在すると考えられる。

本稿では、文学作品における翻訳という観点からこの一因を明らかにすることを目的とする。考察に用いた資料は、川端康成の代表作の1つである『雪国』とこの作品の翻訳として名高いサイデンステッカー訳の *Snow Country* である。

以下、まず『雪国』における自動詞「なる」を用いた表現（本稿では、以下この表現をナル表現と呼ぶ）を、意味的観点に基づいて分類する。次に、この分類を基に、『雪国』のナル表現が、*Snow Country* において、どのように翻訳されているのかについて考察を行う。

2. 意味的観点に基づく『雪国』のナル表現の分類

2.1. 意味的観点に基づく『雪国』のナル表現の類型

『雪国』で使用されていたナル表現は、以下に示すように、意味的観点から大きく「A 主語の変化を表すナル表現」と「B 主語の変化を表さないナル表現」の2つに分類することができる。また、後者については、さらに「B1 本来的構造、制度を表すナル表現」「B2 可能を表すナル表現」「B3 未来におけるコトガラの成立を表すナル表現」「B4 ある仮定条件のもとでのコトガラ成立を表すナル表現」「B5 推論的結果を表すナル表現」の5つに分類することができる。

〈『雪国』におけるナル表現の類型〉

A 主語の変化を表すナル表現

B 主語の変化を表さないナル表現

B1 本来的構造，制度を表すナル表現

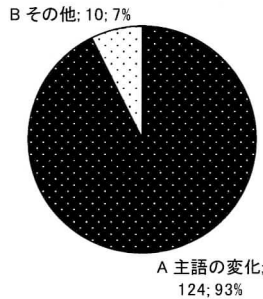
B2 可能を表すナル表現

B3 未来におけるコトガラの成立を表すナル表現

B4 ある仮定条件のもとでのコトガラの成立を表すナル表現

B5 推論の結果を表すナル表現

A と B の出現数は、次のグラフ 1 のようであった。



グラフ 1 「雪国」における変化の「なる」と
その他の「なる」の出現数

グラフ 1 からは、A の出現数が B の出現数を大きく上回っていることがわかる。この結果は、現代語の書記言語に現れる「なる」の中心的意味が「変化」の意味であることを示唆している¹⁾。

次の 2.2 では、主語の変化を表すナル表現について、2.3 では、主語の変化を表さないナル表現について、具体例を挙げながら概観し、2.4 では、両表現の意味的派生関係について考察を行う。

1) ただし、講演や接客場面では変化を表すナル表現よりも次の (i) (ii) のような変化を表さない、待遇的な働きを有するナル表現の方がよく用いられる傾向にある。

(i) それを表したものがこちらの図になります。

(ii) おたばこの吸える席はあちらになります。

2.2. 主語の変化を表すナル表現

次の (1) - (4) は、『雪国』に存在した、主語の変化を表すナル表現である。

- (1) きつと真赤になるにきまっている、(雪国 p. 42)
- (2) 帯をゆるめるか、少し横になって、醒ましたらいいだろう。(雪国 p. 29)
- (3) やがては日本踊の新人とも知り合い、研究や批評めいた文章まで書くようになった。(雪国 p. 21)
- (4) 自分で買えるようになったら、駄目。(雪国 p. 34)

これらのうち、(1) は、自然発生的に生じる主語の外見上の変化を、(2) は、意図的動作によって引き起こされる主語の外見上の変化を表している。また、(3) は、主語の習慣的動作の変化を、(4) は、主語の能力の変化を表している。なお、このような主語の変化を表すナル表現のうち、(3) (4) のように、主語の習慣や能力の変化を表すものについては、「ようになる」という形態をとる。

次に、主語の変化を表さないナル表現について見ていく。

2.3. 主語の変化を表さないナル表現

主語の変化を表さないナル表現には、次の (5) - (10) のようなものが存在した。

- (5) 畑沿いに水音の方へ下りて行くと、川岸は深い崖になっていて、(雪国 p. 96)
- (6) 勘定書を見ると、朝の五時に帰ったのは五時まで、翌日の十二時に帰ったのは十二時まで、すべて時間勘定になっていた。(雪国 p. 66)
- (7) 女一人くらいどうにでもなりますわ。(雪国 p. 114)
- (8) 晩くなるかもしれないけれど、きつと行くわ。(雪国 p. 101)
- (9) 旧温泉と新温泉との間をお座敷通いすれば一里も歩くわけになるし、(雪国 p. 87)
- (10) 島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だったから、横寝している男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかった。

娘は島村とちょうど斜めに向い合っていることになるので、(雪国 p. 8)

上記のうち (5) (6) は「B1 本来的構造, 制度を表すナル表現」に, (7) は「B2 可能を表すナル表現」に, (8) は「B3 未来におけるコトガラ¹⁾の成立を表すナル表現」に, (9) は「B4 ある仮定条件のもとでのコトガラ²⁾の成立を表すナル表現」に, (10) は「B5 推論的結果を表すナル表現」に相当する。(5) は明示的主語の「川岸」が「深い崖」という構造にあることを, (6) は非明示的主語の「勘定」が「時間勘定」という制度になっていることを, (7) は非明示的主語の「(女一人くらの) 生活」が可能であることを, (8) は未来において「(帰りが) 晚くなる」というコトガラ³⁾が成立することを, (9) は「旧温泉と新温泉との間をお座敷通いする」という仮定条件のもとで「一里も歩く」というコトガラ⁴⁾が成立することを, (10) は「島村の真横ではなく, 一つ前の向側の座席だった」という命題から導かれる「娘は島村とちょうど斜めに向い合っている」という推論的結果を表している。

以上, 2.2, 2.3では, 2.1で示した『雪国』におけるナル表現の類型の具体例を見てきた。次に2.4では, 主語の変化を表すナル表現と主語の変化を表さないナル表現との意味的派生関係について考察する。

2.4. 主語の変化を表すナル表現と主語の変化を表さないナル表現との意味的派生関係

以下, 「A と B1との派生関係」「A と B2との派生関係」「A と B3との派生関係」「A と B4との派生関係」「A と B5との派生関係」の順に, 主語の変化を表すナル表現と主語の変化を表さないナル表現との意味的派生関係について考察を行う。

まず, 「A と B1との派生関係」について考える。2.3で挙げた (5) (6) の本来的構造, 制度を表すナル表現には, 「ている」というアスペクト形式が用いられている。しかし, これらの「ている」は, 次の (11) (12) のような, 変化の結果の状態というアスペクトを表しているというよりは, むしろ, (13) (14) のような主語の本来的状态を表している。

(11) 財布が落ちている。

(12) このプレーヤーは壊れている。

- (13) この作品は変わっている。
(14) この城は、森に囲まれている。

具体的に見ていくと、(5)の「深い崖になっていて」は、「川岸」の構造がある構造から「深い崖」という構造に変化し、その結果の状態が持続していることを表しているというよりは、むしろ、「川岸」が「深い崖」という本来的構造を有していることを表している。また(6)の「時間勘定になっていた」も、「勘定」の方法が、ある方法から「時間勘定」に変化し、その結果の状態が持続していたことを表しているというよりは、むしろ、「勘定」の方法が最初から「時間勘定」に定められていたことを表している。

このように、(5)(6)の「なっている」は、主語の本来的状态を表していると見ることが可能である。しかし、本来的であるか、変化の結果であるかという違いを除けば、(5)(6)の状態は、次の(5)'(6)'のような変化の結果として示される状態と内容的に変わらない。

- (5)' 川岸は、震災により深い崖になっていた。
(6)' 勘定書を見ると昨日までは、日割だったのに今日は時間勘定になっている。

従って、B1の本来的構造、制度を表すナル表現は、変化の結果の状態を表す「なっている」から、類似性に基づく意味拡張によって派生されたものと見ることができる。

次に「AとB2との派生関係」について考える。可能を表す「なる」は、「どうか」「なんとか」「どうにでも」「なんとでも」といった疑問詞を含む様態副詞と共に用いられ、主語、あるいはこれと関係するコトガラが成立可能であることを表す。一方、主語の変化を表すナル表現は、次の(15)のように主語の変化のみならず、コトガラの成立をも表している。

- (15) [コトガラ[主語 部屋が] きれい] になる。
→解釈1：主語の「部屋」の状態変化
→解釈2：「部屋がきれい」というコトガラの成立

従って、B2の可能を表すナル表現は、コトガラの成立を表しているという

点において A の主語の変化を表すナル表現と派生関係にある²⁾。

次に「A と B3との派生関係」について考える。A のナル表現は、(15) の解釈 2 のように、コトガラ³⁾の成立をも表しているが、B3のナル表現も、次の(8)' のようにコトガラ⁴⁾の成立を表している。

(8)' [コトガラ((帰りが) 晩く] なる。

→「(帰りが) 晩い」というコトガラ⁵⁾の未来における成立

従って、B3の未来のコトガラ⁶⁾の成立を表すナル表現についても、コトガラ⁷⁾の成立を表しているという点において、A のナル表現と派生関係にある。

次に「A と B4との派生関係」について考える。B4のナル表現も、次の(9)' のようにコトガラ⁸⁾の成立を表している。

(9)' 旧温泉と新温泉との間をお座敷通いすれば [コトガラ一里も歩く] わけになる。

→「旧温泉と新温泉との間をお座敷通いする」という条件のもとでの「一里も歩く」というコトガラ⁹⁾の成立

従って、B4のある仮定条件のもとでのコトガラ¹⁰⁾の成立を表すナル表現についても、コトガラ¹¹⁾の成立を表しているという点において、A のナル表現と派生関係にある。

最後に「A と B5との派生関係」について考える。B5のナル表現も、次の(10)' のようにコトガラ¹²⁾の成立を表している。

(10)' 島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だったから、横寝している男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかった。

2) ナル表現は、本来、主語の変化ではなく、次の (i) (ii) のような主語の発生を表していたと考えられる。

(i) 親無しに 汝 (なれ) 奈理 (ナリ) けめや (日本書記・推古21年12月・歌謡)

(ii) 橘は おのが枝々 那例 (ナレ) れども (日本書記・天智10年正月・歌謡)

また、主語の変化を表すナル表現と主語の発生を表すナル表現は何らかの成立を表しているという共通点を持つことから、前者は後者から派生したものと考えられる。

[コトガラ娘は島村とちょうど斜めに向い合っている] ことになる。
→「島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だった」という事実
に基づく「娘は島村とちょうど斜めに向い合っている」という推
論的結果としてのコトガラの成立

ただしこの場合のコトガラとは、推論的結果としてのコトガラであり、コトガラの成立とは、意識の上での推論的結果の成立を意味する。しかしながらコトガラの成立を表す点においては、Aと変わりが無い。従って、B5の推論的結果を表すナル表現についても、コトガラの成立を表しているという点においてAのナル表現と派生関係にある。

以上、2では、まず、『雪国』におけるナル表現を意味的観点から主語の変化を表すものと主語の変化を表さないものとに分類し、次に、これらのナル表現の具体例を概観し、最後に、両者のナル表現の意味的派生関係について分析を行った。次の3では、これらのことを踏まえ、『雪国』におけるナル表現が *Snow Country* においてどのように英訳されているのかについて考察を行う。

3. ナル表現の英訳の特徴

3.1. 変化を表すナル表現の英訳

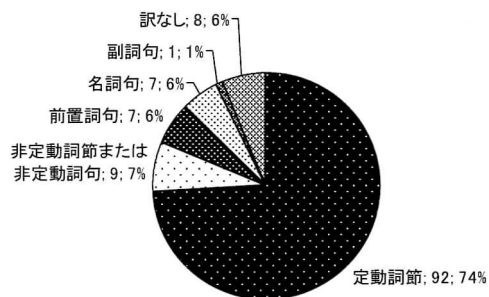
3.1.1. 定動詞節の英訳

『雪国』における変化を表すナル表現は、2.1のグラフ1に示したように124件存在したが、このうち8件については、これに該当する *Snow Country* の英訳が欠如していた。また、残る116件については、次のグラフ2に示すように、統語的観点から、大きく、定動詞節³⁾、非定動詞節または非定動詞句、前置詞句、名詞句、副詞句の5つに分類される。

これらのうち最も多いのが74%の比率で現れた定動詞節である。以下この定動詞節の英訳の特徴について見ていく。

定動詞節として現れた英訳は、意味的に「①ナル表現と同種の変化、あるいは変化と変化後の状態を表すもの」「②ナル表現が表す変化により生じた状態を表すもの」「③ナル表現が表す変化を引き起こすコトガラを表すもの」「④その他」の4つに分類することができる。次の(16)(17)のbは各々①

3) 定動詞節とは、動詞の要素が定動詞である節のことを言い、定動詞とは、形態的に主語の人称やコトガラの時制の影響を受けている動詞のことを言う。



グラフ 2 変化を表すナル表現の英訳の統語的分類

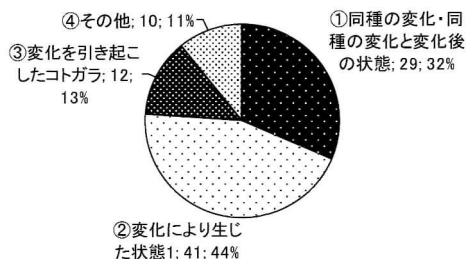
のうちの「ナル表現と同種の変化を表すもの」と「ナル表現と同種の変化と変化後の状態を表すもの」に相当する。また、(18)(19)のbは、各々②のうちの「主語がナル表現の主語と類似するもの」と「主語がナル表現の主語と類似しないもの」に相当する。さらに、(20)(21)のbは、各々③のうち「主語がナル表現と類似するもの」と「主語がナル表現と類似しないもの」に相当する。

- (16)a. 島村が疑うと、女はむきになって、しかし一歩譲って、(雪国 p. 22)
- b. When Shimamura expressed his doubts, she flared up, (*Snow Country* p. 26)
- (17)a. お客さんのくれるのを袂へ入れたり帯に挟んだりして帰るから、こんなに皺になってるけれど、(雪国 p. 121)
- b. I push them up my sleeve or inside *my obi* when a guest gives them to me, and some of them are a little smashed. (*Snow Country* p. 144)
- (18)a. 駒子はまた赤くなると、(雪国 p. 42)
- b. but she was blushing again. (*Snow Country* p. 51)
- (19)a. 寒くなったとみえて、食いが悪くなりました。(雪国 p. 95)
- b. It's colder, and they aren't eating well, (*Snow Country* p. 115)
- (20)a. そういう彼の日本踊などの話が、女を彼に親しませる助けとなったのは、その知識が久し振りで現実に役立ったともいうべきありさまだったけれども、(雪国 p. 21)
- b. It might be said that his knowledge was now for the first time

in a very great while being put to use, since talk of the dance helped bring the woman nearer to him; (*Snow Country* p. 25)

- (21) a. 忽ち島村は頬から鳥肌が立ちそうに涼しくなって, (*雪国* p. 59)
 b. A chill swept over Shimamura. The goose flesh seemed to rise even to his cheeks. (*Snow Country* p. 71)

①-④のうち最も出現率が高かったのは、グラフ3に示すように、「②ナル表現が表す変化により生じた状態を表すもの」であり、次に出現率の高い「①ナル表現と同種の変化、あるいは変化と変化後の状態を表すもの」を12ポイント上回っていた。



グラフ3 定動詞節の意味的特徴

この言語事実は、日本語と英語の間に「日本語は物事を変化という側面から描く傾向が英語に比べて強く、英語はこの傾向が日本語に比べて弱い」という表現差が存在することを示唆する。

次に、①-③の各々の英訳の統語的特徴について見ていく。

まず、①の英訳は、統語的観点から、SV, SVC, SVA, SVO, SV_{pass}, SV_{pass}Aに分類することができる。なおAで示される付加詞は、Vが義務的に取るものとする。先に挙げた(16b)は、これらのうちのSVの例に相当し、次の(22)-(26)のbは、順に、SVC, SVA, SVO, SV_{pass}, SV_{pass}Aの例に相当する。

- (22) a. よくなったの? (*雪国* p. 77)
 b. Did she get better? (*Snow Country* p. 95)
 (23) a. 屋根を外れたポンプの水先が揺れて、水煙となって薄白いのも,
 天の河の光が映るかのようだった。(*雪国* p. 145)

- b. Occasionally a pump messed the roof, and the end of its line of water wavered and turned to a faint white mist, as though lighted by the Milky Way. (*Snow Country* p. 171)
- (24) a. お師匠さんが港へ行ってて、肺炎になったんですの。(雪国 p. 77)
- b. She had pneumonia down on the coast. (*Snow Country* p. 95)
- (25) a. と、まるでおとなしい女になってしまって、(雪国 p. 54)
- b. She was completely tamed. (*Snow Country* p. 65)
- (26) a. 登山を好む島村は山を眺めながら歩くと放心状態となって、(雪国 p. 47)
- b. he was seized with a certain abandon as he walked along gazing at the mountains (*Snow Country* p. 57)

それぞれの出現数は、以下の表 1 の通りである。

表 1 ①の英訳の統語構造とその出現数

SV	SVC	SVA	SVO	SV _{pass}	SV _{passA}
8	9	4	4	2	2

SV の V として使用されていた動詞は、‘clear 〈1 件〉’ ‘change 〈1 件〉’ ‘flare up 〈1 件〉’ ‘flush 〈1 件〉’ ‘grow up 〈1 件〉’ ‘improve 〈1 件〉’ ‘lean 〈1 件〉’ ‘lie down 〈1 件〉’ であり、いずれも主語 S の状態変化を表していた。

SVC の V として使用されていた動詞は、‘become 〈3 件〉’ ‘go 〈3 件〉’ ‘come back 〈1 件〉’ ‘get 〈1 件〉’ ‘grow 〈1 件〉’ であり、いずれも変化後の状態を表す C と結合し、主語 S の状態変化を表していた。

SVA の V として使用されていた動詞は、‘turn 〈2 件〉’ ‘fall 〈1 件〉’ ‘melt 〈1 件〉’ であり、いずれも変化後の状態を表す A と結合し、主語 S の状態変化を表していた。

SVO の V として使用されていた動詞は、‘have 〈2 件〉’ ‘begin 〈1 件〉’ ‘stop 〈1 件〉’ であり、いずれも主語 S の動作ならびに状態変化を表していた。

SV_{pass} の V_{pass} として使用されていた be 動詞 + 動詞の過去分詞は、‘be

tamed 〈1件〉’ ‘be smashed 〈1件〉’ であり、主語 S の状態変化もしくは、S の状態変化と変化後の状態を表していた。

SV_{pass}A の V_{pass} として使用されていた be 動詞 + 動詞の過去分詞は、‘be seized 〈1件〉’ ‘be shut off 〈1件〉’ であり、いずれも S の状態変化を表していた。ただし、前者の A にあたる ‘with NP’ は、S の変化の原因を表しているのに対し、後者の A にあたる ‘from NP’ は、変化の原因ではなく、‘shut off’ という動作の基点を表していた。以上が①の英訳の統語的特徴である。

①の英訳は、ナル表現と同種の変化、あるいは変化と変化後の状態を描いているが、文型としては表 1 のように 6 種類が存在し、各々の文型の出現数に大きな差は存在しなかった。

また、これら 6 種類のうち、自動詞述語が結果を表す成分を義務的に取るという点においてナル表現の文型と類似する SVC, SVA の V, すなわち変化を表す連辞動詞⁴⁾としては、先に挙げた ‘become’ ‘go’ ‘come back’ ‘get’ ‘grow’ ‘turn’ ‘fall’ ‘melt’ の 8 種類が存在したが、各々の出現数に大きな差は見られなかった。この言語事実は、英語の中に外延が変化の「なる」と同程度かそれ以上である、変化を表す連辞動詞が存在しないこと、すなわち、変化を表す英語の連辞動詞は、日本語の「なる」よりも表せる変化の種類が制限されていることを示唆する。実際、日本語の「なる」は、一般的な状態変化や自然発生的に生じる変化のみならず、次の (27) (28) のような主語の習慣、能力の変化や (29) のような主語の意図により引き起こされる変化をも表すことができるが、英語には、こういった種類の変化をも語義の中にすべて包括している、語義的抽象度の高い特定の連辞動詞は存在しない。

(27)a. 自分で買えるようになったら, 駄目。(雪国 p. 34) (本稿の (4))

b. When I had enough money to buy a diary, it wasn't the same any more. (*Snow Country* p. 40)

(28)a. 駒子のしげしげ会いに来るのを待つ癖になってしまっていた。(雪国 p. 130)

b. He had simply fallen into the habit of waiting for those frequent

4) C (補語) や A (付加詞) を義務的に取る自動詞。

visits. (*Snow Country* pp. 154–155)

- (29) a. 酔った駒子が客を追いつめるような中腰になって (雪国 p. 116)
b. She leaned forward half from her seat, as though to push her advantage home by force. (*Snow Country* pp. 138–139)

従って、このようなことが、①のタイプの英訳がナル表現と同種の変化、あるいは変化と変化後の状態を表すものでありながら、用いられている文型や動詞に多様性が見られる一因となっていると考えられる。

次に、②のタイプの英訳の統語的特徴について見ていく。②の英訳の統語構造と出現数は、以下の表 2 の通りであった。

表 2 ②の英訳の統語構造とその出現数

SV	SVC	SVA	SVO
4	27	2	8

先の (18b) は、SV に、次の (30) – (32) の b は、各々、SVC, SVA, SVO に相当する表現例である。

- (30) a. おや、よくなって帰りましたか。 (雪国 p. 50)
b. He's well again? (*Snow Country* p. 60)
- (31) a. そのうち雪になると、山から出歩くのが難渋になるんでしょう。
(雪国 p. 133)
b. It will be next to impossible for them to go out once the heavy snows begin. (*Snow Country* p. 158)
- (32) a. やがては日本踊の新人とも知り合い、研究や批評めいた文章まで書くようになった。(雪国 p. 21) (本稿の (3))
b. and presently he had made friends with rising figures in the dance world and was writing what one might call research pieces and critical essays. (*Snow Country* p. 24)

SV の V として使用されていた動詞は状態を表す ‘worry <1件>’ と変化を表す ‘blush <1件>’ と動作を表す ‘eat <1件>’ ‘call out <1件>’ であり、‘blush’ と ‘eat’ については「be 動詞 + 動詞の ing 分詞」の形で主語 S の

状態を表しており，‘call out’ については，段階を表す副詞 ‘almost’ と結合し，主語 S の状態を表していた。

SVC の V として使用されていた動詞は，‘be 〈24件〉’ ‘seem 〈2件〉’ ‘lay 〈1件〉’ であり，いずれも状態を表す C と結合し，主語 S の状態を表していた。

SVA の V として使用されていた動詞は，‘be 〈2件〉’ であり，可能性の度合いや空間的位置を表す A と結合し，主語 S の状態を表していた。

SVO の V として使用されていた動詞は，状態を表す ‘feel 〈1件〉’ ‘take 〈1件〉’ ‘want 〈1件〉’ と動作を表す ‘write 〈1件〉’ ‘try 〈1件〉’ ‘stand 〈1件〉’ ‘go 〈1件〉’ ‘say 〈1件〉’ で，これらのうち ‘go’ については，主語 S の習慣的動作としての状態を表していた。また ‘write’ については，「be 動詞＋動詞の ing 分詞」の形で主語 S の状態を表していた。さらに，‘want’ ‘stand’ については，否定を表す副詞 ‘not’ と，‘try’ については，同じく否定を表す副詞 ‘no longer’ と，‘say’ については，‘have to’ という助動詞と結合し，主語 S の状態を表していた。以上が②の英訳の統語的特徴である。

次に，③のタイプの英訳の統語的特徴について見ていく。③の英訳の統語構造と出現数は，以下の表 3 の通りであった。

表 3 ③の英訳の統語構造とその出現数

SV	SVO	SVOC
3	7	2

先の (21b) は SV に，(20b) は，SVO に，次の (33b) は，SVOC に相当する表現例である。

- (33)a. こうやって芸者衆の三味線を聞いていますと，じれったくな
たりして，(雪国 p. 49)
- b. It makes me very impatient to hear them playing. (*Snow Country* p. 60)

SV の V として使用されていた動詞は，‘sweep 〈1件〉’ ‘walk 〈1件〉’ ‘begin 〈1件〉’ であり，SVO の V として使用されていた動詞は，‘help 〈1

件)’ ‘set off <1 件>’ ‘want <2 件>’ ‘cut <1 件>’ ‘have <1 件>’ ‘fill <1 件>’ であり、SVOC の V として使用されていた動詞は、使役動詞の ‘make <2 件>’ であった。

以上、①－③の英訳の統語的特徴について見てきた。

次の3.1.2では、定動詞節以外の英訳の特徴について見ていく。

3.1.2. 定動詞節以外の英訳

グラフ2に示したように、定動詞節以外の英訳には、非定動詞または非定動詞句、前置詞句、名詞句、副詞句が存在した。

まず、非定動詞節または非定動詞句の統語的特徴について述べると、次の(34b)のように付帯状況を表す従属節として現れているものが2件、(35b)のように後置修飾句として現れているものが2件、(36b)のように前置修飾句として現れているものが1件、(37b)のように主語として現れているものが1件、(38b)のように目的語として現れているものが1件、(39b)のように動詞の補語として現れているもの1件、(40b)のように形容詞の補語として現れているものが1件存在した。

- (34) a. 蝶はもつれ合いながら、やがて国境の山より高く、黄色が白くなってゆくにつれて、遥かだった。(雪国 p. 24)
- b. The butterflies, weaving in and out, climbed higher than the line of the Border Range, their yellow turning to white in the distance. (*Snow Country* p. 29)
- (35) a. 山峡は日陰となるのが早く、もう寒々と夕暮色が垂れていた。(雪国 p. 51)
- b. The color of evening had already fallen on the mountain valley, early buried in shadows. (*Snow Country* p. 62)
- (36) a. 陰になる山やまだ日光を受けている山が重なり合い、(雪国 p. 63)
- b. Mountains still in the sunlight stood out against shadowed mountains. (*Snow Country* p. 76)
- (37) a. 相手が芸者というものになった今は反って言い出しにくかった。(雪国 p. 36)
- b. he had found, surprisingly, that her being a geisha made it

even more difficult for him to be free and open with her. (*Snow Country* p. 43)

- (38) a. いいえ、ただなりたいと思っただけですわ。(雪国 p. 114)
b. I just thought I'd like to be a nurse. (*Snow Country* p. 137)
- (39) a. 子供が出来たり、体が悪くなったりすることですわ。(雪国 p. 23)
b. If there should happen to be a child, or some sort of disease. (*Snow Country* p. 27)
- (40) a. ほんとうに人を好きになれるのは、もう女だけなんですから。
(雪国 p. 108)
b. After all, only women are able really to love. ” (*Snow Country* p. 130)

次に、前置詞句の統語的特徴について述べると、次の (41b) のように原因を表す付加詞として現れているものが3件、(42b) のように空間を表す付加詞として現れているものが2件、(43b) のように時を表す付加詞として現れているものが1件、(44b) のように後置修飾句として現れているものが1件存在した。

- (41) a. そこらにつと手をやりそうになって、島村は指先がふるえた。
(雪国 p. 145)
b. His fingers trembled from the urge to touch it. (*Snow Country* p. 172)
- (42) a. 静けさが冷たい滴となって落ちそうな杉林を抜けて、(雪国 p. 98)
b. where the quite seemed to fall in chilly drops. (*Snow Country* p. 119)
- (43) a. やがて年の暮から正月になれば、あの道が吹雪で見えなくなる。
(雪国 p. 40)
b. By the end of the year, that road would be shut off from sight by the snowstorms. (*Snow Country* pp. 48-49)
- (44) a. ほかの男の子供を産んで母親になった駒子の姿が不意に浮んで来たりして、(雪国 p. 130)

- b. the image of Komako as the mother of another man's children suddenly floated into his mind. (*Snow Country* p. 154)

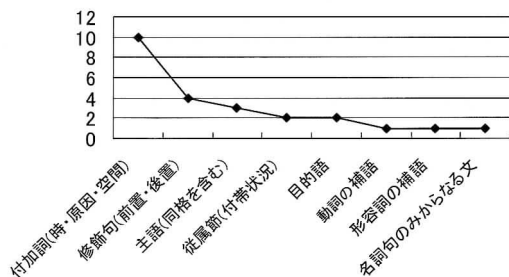
次に、名詞句の統語的特徴について述べると、次の (45b) のように時を表す付加詞として現れているものが 3 件、(46b) のように主語として現れているものが 1 件、(47b) のように目的語として現れているものが 1 件、(48b) のように先行する主語と同格の関係にあるものが 1 件、(49b) のように名詞句のみの文として現れているものが 1 件存在した。

- (45) a. 島村は今になって気がついた。(雪国 p. 26)
 b. It occurred to him now that (*Snow Country* p. 31)
- (46) a. 百九十九日前のあの時も、こういう話に夢中になったことが、自ら進んで島村に身を投げてかけてゆくはずみとなったのも忘れてか、(雪国 p. 35)
 b. Had she forgotten that a hundred and ninety-nine days earlier exactly this sort of conversation had set off the impulse to throw herself at Shimamura? (*Snow Country* pp. 42-43)
- (47) a. 君が言ったんじゃないか、気持ちがいいになりそうだって、(雪国 p. 119)
 b. But didn't you say it yourself? (*Snow Country* p. 140)
- (48) a. そんな辛苦をした無名の工人はとくに死んで、その美しい縮だけが残っている。夏に爽涼な肌触りで島村らの贅沢な着物となっている。(雪国 p. 132)
 b. The nameless workers, so delight while they lived, had presently died, and only the Chijimi remained, the plaything of men like Shimamura, cool and flesh against the skin in the summer. (*Snow Country* p. 157)
- (49) a. もう紅葉もおしまいになるわ。(雪国 p. 123)
 b. The end of the maple leaves. (*Snow Country* p. 145)

最後に、副詞句の統語的特徴について述べると、次の (50b) のように時を表す付加詞として用いられているものが 1 件存在した。

- (50) a. 夜晩くなると，蠟燭をともして本を読むわ。(雪国 p.83)
 b. when I read late in the night I always use a candle to save electricity. (*Snow Country* p.101)

以上，変化を表すナル表現と対応する定動詞節以外の英訳の特徴について見てきた。この種の英訳の統語的役割と出現数はグラフ4の通りである。



グラフ4 定動詞節以外の英訳の統語的役割と各出現数

グラフ4に示されるように，ナル表現と対応する，定動詞節以外の英訳は，付加詞として現れているものがやや多いものの，様々な統語的成分として現れていた。

3.2. 主語の変化を表さないナル表現の英訳

3.1では，主語の変化を表すナル表現の英訳の特徴を見てきた。ここでは主語の変化を表さないナル表現の英訳の特徴について見ていく。

このようなナル表現としては，「B1 本来的構造，制度を表すナル表現」が4件，「B2 可能を表すナル表現」が1件，「B3 未来におけるコトガラ」の成立を表すナル表現」が1件，「B4 ある仮定条件のもとでのコトガラ」の成立を表すナル表現」が2件，「B5 推論の結果を表すナル表現」が2件の計10件が存在した。次の(51)－(54)はB1の表現例とその英訳である。

- (51) a. 壁の向側はどうなってるのだろうと考えると，(雪国 p. 44)
 b. Wondering what might be on the other side of the wall, (*Snow Country* p. 54)
- (52) a. 勘定書を見ると，朝の五時に帰ったのは五時まで，翌日の十二時に帰ったのは十二時まで，すべて時間勘定になっていた。(雪

国 p. 66) (本稿の (6))

- b. The bill as matter of fact was computed by the hour— “Left at five,” or “Left at twelve”—without the usual charge for overnight services. (*Snow Country* p. 79)
- (53) a. 畑沿いに水音の方へ下りて行くと、川岸は深い崖になっていて、
(雪国 p. 96) (本稿の (5))
- b. Staring down along the garden path toward the sound of the water, they came out on the high river bank. (*Snow Country* p. 116)
- (54) a. 一座敷で一本が自分の貰いになるので、(雪国 p. 88)
- b. She received a fixed amount for herself from each party, and the larger number of party (*Snow Country* p. 108)

B1については、(51) (52) のようにナル表現と同様、構造、制度を表す表現として英訳されているものと、(53) (54) のようにナル表現が表す構造、制度と関係する何らかの動作を表す表現として英訳されているものとがあった。

次に B2の表現例とその英訳としては、次の (55) が存在し、ナル表現と同様 ‘can’ を用いた可能を表す表現として英訳されていた。

- (55) a. 女一人くらいどうにでもなりますわ。(雪国 p. 114) (本稿の (7))
- b. A woman by herself can always get by. (*Snow Country* p. 136)

次に、B3の表現例とその英訳としては、次の (56) が存在し、ナル表現と同様未来におけるコトガラの成立を表す表現として英訳されていた。

- (56) a. 晩くなるかもしれないけれど、きつと行くわ。(雪国 pp. 101-102) (本稿の (8))
- b. I may be late, but I'll stop by. (*Snow Country* p. 122)

次に、B4の表現例とその英訳としては、次の (57) (58) が存在し、(57) については、「になる」の直前に現れる命題を推量する表現として、(58) については、「わけになる」の直前に現れる命題を既定の事実として断定する表

現として英訳されていた。

- (57) a. それじゃ本妻よりお妾さんの方が年上になるところだったね。
(雪国 p. 81)
- b. The mistress must be older than the wife, then. (*Snow Country* p. 99)
- (58) a. 旧温泉と新温泉との間をお座敷通いすれば一里も歩くわけにな
るし, (雪国 p. 87) (本稿の (9))
- b. She walked two miles and more between parties at the old
spring and the new, (*Snow Country* p. 105)

最後に、B5の表現例とその英訳としては、次の (59) (60) が存在し、いずれについても「ことになる」の直前に現れる命題にテンス、アスペクトが加わった表現として英訳されていた。

- (59) a. 島村の真横ではなく、一つ前の向側の座席だったから、横寝している男の顔は耳のあたりまでしか鏡に写らなかった。
娘は島村とちょうど斜めに向い合っていることになるので,
(雪国 p. 8) (本稿の (10))
- b. The pair were not directly opposite Shimamura but rather one seat forward, and the man's head showed in the window-mirror only as far as the ear. Since the girl was thus diagonally opposite him, (*Snow Country* p. 8)
- (60) a. いずれにしろ、島村は彼女を見直したことはなるので, (雪国 p. 36)
- b. In any case, he had revised his view of her, (*Snow Country* p.43)

以上、3.2では、変化を表さないナル表現が *Snow Country* においてどのように英訳されているのかについて見てきた。その結果、このようなナル表現については、次のような種類の英訳が存在することが明らかとなった。

〈変化を表さないナル表現の英訳の種類〉

- ・ナル表現と同様のコトガラを表す表現として英訳されているもの

- ・ナル表現が表すコトガラと関係するコトガラを表す表現として英訳されているもの
- ・「になる」「わけになる」「ことになる」の直前に現れている命題に、テンス、アスペクトならびに推量、断定といったモダリティが加わった表現として英訳されているもの

4. お わ り に

本稿では、『雪国』におけるナル表現が *Snow Country* においてどのように英訳されているのかについて見てきた。

まず、変化を表すナル表現の英訳のうち定動詞節として訳されているものについては、変化により生じた状態を表しているものの出現率が、ナル表現と同種の変化、あるいは変化と変化後の状態を表しているものの出現率よりも12ポイント上回っており、このことから日本語と英語の間に「日本語は物事を変化という側面から描く傾向が英語に比べて強く、英語はこの傾向が日本語に比べて弱い」という表現差が存在することが示唆された。

次に、定動詞節以外の英訳の統語的特徴としては、付加詞として英訳されているものが他の種類の成分として現れているものよりやや多かったものの、これ以外にも多様な成分として現れており、それぞれの出現率に有意と見られる差は存在しなかった。

最後に、主語の変化を表さないナル表現の英訳については、「ナル表現と同様のコトガラを表す表現として英訳されているもの」「ナル表現が表すコトガラと関係するコトガラを表す表現として英訳されているもの」「『になる』『わけになる』『ことになる』の直前に現れている命題に、テンス、アスペクトならびに推量、断定といったモダリティが加わった表現として英訳されているもの」が存在することが明らかとなった。

以上のような英訳の特徴が、*Snow Country* に限定して見られるものであるのか、その他の英訳にも共通して見られるものであるのかについては、他の翻訳作品についての調査結果を待たなければならない。また、英語と日本語の表現差についてさらに詳細に分析するためには、英語母語話者の英訳と日本語母語話者の英訳との比較も必要である。これらについては、今後の研究課題とする。

参 考 文 献

- 安達太郎 (1977) 「『なる』による変化構文の意味と用法」『広島女子大学国際文化学部紀要』4
- 池上素子 (2002) 「変化を表す『なる』—前接する語との共起制限を中心に—」『日本語教育』112
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 佐藤琢三 (1998) 「自動詞ナルと計算理論」『国語学』192
- 佐藤琢三 (1999) 「ナツテイルによる単純状態の叙述」『言語研究』116
- 佐藤琢三 (2000) 「ナルの文の発話と対人行為」『現代日本語の語彙・文法』くろしお出版
- 竹田美喜 (1980) 「言語主体認識の広がり—動詞『なる』の場合—」『愛文』16
- 寺村秀夫 (1976) 「『ナル』表現と『スル』表現—日英『態』表現の比較」『国語シリーズ 別冊4 日本語と日本語教育—文字・表現編—』国立国語研究所
- 西山佑司 (1995) 「コピュラ文の意味と変化文の曖昧性について」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』27
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法』くろしお出版
- Greenbaum, S. [他] 著, 池上嘉彦 [他] 訳 (1995) 『現代英語文法 大学編 新版』紀伊国屋書店
- Hinds, J. (1986) *Situation vs. Person Focus*, くろしお出版
- Matsumoto, Y. (1996) "5 Subjective-Change Expressions in Japanese and Their Cognitive and Linguistic Bases" *Cognitive Theory of Language and Culture*, Chicago: University of Chicago Press.
- Sakai, T. (2004) "Cross-space Connectors and Interpretations of the Change Predicate *Naru* in Japanese" 『日本認知言語学会論文集』4

用 例 の 出 典

- 川端康成著『雪国』新潮文庫
- 川端康成著; Seidensticker, G. Edward 訳 *Snow Country*. Vintage Books; New York